

・小説の二大ジャンル

みなさんは小説のジャンルというと、どんなジャンルを思い浮かべますか？ まず「純文学」というジャンルがありますね。それから「エンターテインメント小説」があり、こちらはミステリ、時代小説などとさらに細分化できます。

純文学とエンターテインメント小説の境界は曖昧で、厳密には区別は困難ですが、現実には小説を掲載する雑誌に純文学作品を掲載する文芸誌（『新潮』『文学界』『群像』など）とエンターテインメント中心の小説誌（『小説新潮』『オール語物』『小説現代』など）がある以上、この二つが小説の二大ジャンルといえるでしょう。

・いい小説

「再読に値するような構造や仕掛けを持った作品」は、「重層的な作品」とも言い換えられます。いい小説は、一通りの読みで進んでいく単線的なお話ではなく、複数のテーマが折り重なってできているのです。

・小説を「書きたい」理由

小説を「書きたい」と思うのは、何らかの「過剰」または「欠如」を抱えているからにはかなりません。

今までとはちょっと違う何かになりたい。

心に収めきれない思いがある。

何かを求めてやまない。

そんなやむにやまれぬ思いがあるときに、人は小説を書きたいと思うのではないのでしょうか。「過剰」な何か、あるいは「欠如」した何かがなければ、本当は小説など無理に書かなくてもいいのです。

・小説家に向く人

意外かもしれませんが、頭のよすぎる人というのも小説家に向いていない気がします。頭の回転が速い人は、どうしても結論を急いだり、これはこうで、あれはこうでというふうに、せっかちに白黒つけたがる傾向があるからです。

結論を急ぐことなく、じっくりと自分の頭、自分の言葉でものを考えられる人のほうが、小説を書くという営みには向いているようです。拙速に答えに飛びつかないという人が小説家には多いのです。いくら考えても結論が出ない問題を問題という**問いの形のま**ま、問いそのものが小説のテーマになっていることが思いのほか多いことも事実です。

・小説を書きたいが、ほとんど小説を読まない人

これから小説を書こうと思っている人には、まず多くの小説を読むことをお勧めします。最近では、小説を書きたいといいながら、ほとんど小説を読んでいない人があまりにも多いと感じます。

・選考

応募作は、最初はず、いわゆる「下読み」の人たちに読まれます。下読みを担当するのは、新人の作家や批評家、文芸誌編集の経験者などです。私も毎年、新人賞の下読みをやっています。

選考のだいたいの流れは次のとおりです。

ある新人賞に、仮に一〇〇〇の応募作があったとしましょう。これを一〇人の下読み担当者が、一人一〇〇本ぐらいつつ、手分けをして読みます。編集部からは「いい作品を上位5%にしばってください」との指示があり、一〇人それぞれ一〇〇本のうち五本を編集部へ推薦します。

ただ単純に推薦するのではなく、一〇〇本すべての作品一つひとつにコメントを書き、A、B、C、D、Eなどのランクに分けて提出します。

次に編集部の全員が、下読みの一〇人が高く評価した計五〇本の作品を読み、そこからさらに五本の候補作を選ぶための話し合いをします。そこで決まった五本を、ようやく選考委員の作家たちが読むことになるのです。

選考委員たちは、期間内に五本の候補作を読み、最終選考会に臨みます。

最終選考会は、多数決を基本に、次のような流れで行われます。

まず、一人ひとりの選考委員が、五本の候補作それぞれに○か△か×をつけます。これが一回目の投票です。選考委員が五人なら過半数は三ですから、○を三つ獲得した作品があれば、それが受賞作の最有力候補となります。

しかしそこで即決定とはなりません。次に一人ひとりの選考委員が、五作品それぞれに○をつけた理由、△をつけた理由、×をつけた理由を述べていくのです。全員が全作品にコメントしたら、二回目の投票を行います。

多くの場合、一回目と同じ結果になりますが、はかの選考委員の意見を聞いて考えを変える選考委員が出たときには、逆転が起こります。そこが最終選考会の面白さであり、こわいところでもあるのです。

決着がいつまでもつかない事態にならないよう、選考委員の数は奇数がいいとされています。

・小説を書いて生活するのは難しい

しかし私は「仕事を辞めては絶対にだめ」と言っています。直木賞受賞や、大ベストセラーを出すといったことがない限りは、定収入を手放さないほうが賢明なのです。

小説を書いて生活するのは、決して楽なことではありません。**経済的なことだけを考え**ると「割に合わない」のが現実です。

それでもなぜ人は小説を書くのか。

小説を書く価値はどこにあるのか。

この本の最後に、結論として書きたいと思っています。

・小説のネタ

これに対し「状況的危機」とは、社会的、偶発的な要因によって生じる危機で、予測することはほとんど不可能です。病気、事故、自然災害、戦争、倒産、喪失、離別、転居、異文化生活、転職、死などがそうで、自分個人ではどうしようもないことが多いだけに、「なぜこんなことに」と、心は激しく揺れることになります。

こうした「分岐点」「節目」「転回点＝ターニング・ポイント」が、なぜ小説のテーマになりうるかという、誰もがそこで初めてものごとを深々と考えるからです。わが身に降りかかってきた状況に、今までの自分の経験、今まで通用してきたやり方や考え方ではとうてい太刀打ちできないからです。

そうすると人は自分を変えざるを得なくなります。これまでのものの見方、考え方を壊し、新しい自分になろうとするのです。その際にもがき苦しむことや、次第に見えてくる真実が、小説になるのです。

書くテーマのヒント

では具体的にどんなテーマがあるか、小説教室で提示している何例かを挙げてみます。

・家族

どんな家族で育ったか。どんな祖父母、父母、兄弟、姉妹がいたか。どんな家族で暮らしているか（夫妻、子ども）。

家族の関係、家族の歴史。そういったことがテーマになります。

・人間関係

揺れる友情、競い合う同僚同士、異性間の友情、上司と部下、先輩と後輩、教師と教え子、医師と患者、パトロンと芸術家……家族外の人間関係も多くの作家がテーマに据えています。

・職業

どんな職業に就き、どんな仕事をしてきたか。人生最大の仕事とは何だったのか。女性

には、主婦になることはどういうことなのか、いいテーマになりえます。

・身体

自分の体、身体性の理想へのこだわり。これは異性の関心を得るためだけではなく、社会や時代の空気との関係もあり、小説のテーマにもなりえます。

・お金

誰の人生にもお金とのつき合いが必ずあり、様々な出来事や、喜怒哀楽にも結びついていきます。また、金銭感覚には、その人の人生観や個性が表れます。

人生の中で大きな位置を占める割に、あまり小説に描かれていないテーマです。

・死

家族の死、自分の死、大量死、不慮の死、病死なども、小説の大きなテーマです。

ただ、死は生の延長上にある一つの形にすぎず、生と死はつねに表裏一体ですから、死を書いても、死だけを書くことにはならないのがふつうです。死を書くことは生を書くことで、生を書くことは死を書くことなのです。

また、小説で描かれるのは、死という現象ではなく「死者」たる人物です。死者はある意味、生者ととも生きています。死者にも確たる存在感がありますし、数も生者より圧倒的に多いのです。

テーマは無限です。すべての時代の、ありとあらゆる人間の、ありとあらゆる状況を網羅している小説はまだまだ善かれていないのですから。

・設計図通りは、案外つまらない

自分なりの設計図を書けたら、いよいよ小説を書き始めます。

いい設計図ができたときは、いい小説が書けそうで嬉しくなるでしょう。

しかし必ずしもそうはならないのが小説を書くことの面白さです。設計図を超える直観が働き始めたときにこそ、いい小説が生まれるのです。

作家の人たちに聞くと、**設計図は一応考えるものの、その通りに書けた作品は案外つまらないものになるのだ**そうです。そういうときは「設計図通りにしか書けなかった」と、残念に思うそうです。

小説を書く作業が本当に面白くなってくるのは、設計図をもとにして書き始めながらも、途中から、自分でも**思いもよらなかったアイデア**がどんどん湧き、**直観が働き始めた**ときなのでしょう。

・タイトル

小説には、ぜひいいタイトルをつけてください。

いいタイトルとは何かを説明するのは難しいのですが、その小説に関して「ああ、このタイトル以外にない」というものを思いついたら、それが**唯一無二のベストなタイトル**だと思っていいでしょう。

『キッチン』は誰が何といおうと『キッチン』で、おそらくほかのタイトルはありえません。

同様に『ノルウェイの森』は『ノルウェイの森』、『ab さんご』は『ab さんご』でしかありえないのです。

・小説の書き出し

よしもとばなの『キッチン』の書き出しは、

私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。

という一文です。

ある批評家がこの文章はおかしいと。「この世でいちばん好きな場所は台所だ」と書くべきだと。作品の続きを読んでも、(いちばん好きな場所)は台所以外になさそうだから「台所だ」と言い切るべきで、自分のことなのにまるで不確かなことのように「と思う」と書くのは、**日本語としてもおかしい**。それに、複文構造にするなら「……台所だと私は思う」と書かなければならないといったのです。「思う」という述語に対する主語がないというわけでしょう。

これに対する彼女の反論は、「台所だ」と書いてしまうと不安定な感じが出ない。不安定な感じを出すために、「と思う」をものすごく意識して入れた。そう返したのです。

・書き出しで気をつけること

意識したほうがいいのは、読者を日常から脱出させる書き出しになっているかどうかということです。いきなり物語世界に飛び込ませるのは、「その世界が以前から続いていることの暗示」や「空間的な移動の示唆」だということが先人たちのすぐれた冒頭から見えてきたのではないのでしょうか。

また「閉じた世界を示唆しない」「モノログに陥らない」のも大切なことです。公募型の新人賞では、「主人公が自室で目覚めたところから始まる小説は無条件に落とされる」とさえいわれています。開かれた世界を冒頭で暗示できてないような作品のあとは推して知るべしということなのでしょう。とはいうもののカフカの『変身』は主人公が自室で目を覚ますところから始まります。何にでも例外はあるということなのでしょうね。

・いい文章をたくさん読む

描写というのは、書く対象を描き写すこと。つまりその対象の形や状態、人物が感じたことなどを言葉で表すこと、言い換えることです。

描写がうまくなるには、いい文章をたくさん読むことです。描写に限らず、会話文、説明文もそうですが、いい文章をたくさん読むことで、自分自身の表現力も豊かになってきます。

逆もまた真なりで、自分がいい文章を書けるようになると、他人が書きたい文章も、より深く読めるようになります。すると読書の楽しみが倍増するのです。

・佐伯作品

佐伯作品の場合は、もう一つ特徴があって、第一巻の冒頭の「特大の謎」は、物語が完結するまで引き延ばされるという点も見逃せない点です。「居眠り磐音（いわね） 江戸双紙」シリーズは四〇巻を超してもまだまったく人気の衰えない空前絶後の大人気シリーズですが、「主人公の磐音の魅力」と「特大・大・小それぞれの謎」がその秘密なのです。

「一つの大きな謎」と「たくさんの小さな謎」、これが昨今人気のあるエンターテインメント小説のほとんどに共通する構造になっています。

...

前述の「居眠り磐音江戸双紙」シリーズの主人公は、直心影流の達人ですが、脱藩した浪人でお金がありません。リストラに遭ったようなものです。江戸に潜伏して彼は、鰻を捌くアルバイトを始めます。剣の腕があるヒーローがアルバイトですよ。高度成長期やバブル期のヒーローものにはこうしたリアリティは存在しませんでした。同時代性が現代に生きる読者の気持ちを掴むのです。キャラクターの設定なり、ストーリーの設定なりにしっかりと組み込んでいきたいところです。

・4つの小説の読み方

小説の読み方には四種類あると私は考えています。著者の読み方、自分の読み方、マーケットの読み方、そして賞の読み方です。

一つ目の読み方は、「著者の読み方」です。著者はどういう狙いでこれを書いたのか。何を訴えたくて書いたのか。そういうことを考えながら、著者の立場に立って作品を読むのです。

自分の読みが正解かどうかはわかりません。でも、「著者はきっとこういうことを書きたかったのだろう」「ここではこういうことが言いたかったようだけど、あまりうまく書けていないな。自分ならこう書くだらう」などと考えながら読書するのは、自分が小説を書く上でも、大変いい勉強になります。

二つ目の読み方は「自分の読み方」です。「自分はこの作品を読んでどう思ったのか」という読み方で、ふだんみなさんがやっているのはこれでしょう。批評家というのは「自分の読み方」の提示を職業としている人たちです。

三つ目は「マーケットの読み方」です。「この作品は五万部は行けそうだ」「三〇万部ぐらい売れるかもしれない」といった、売れる、売れないに主眼を置いた読み方です。個人

的な評価は別として、今の世の中にはウケるだろうといった予測ですから、出版業界の人たちに求められる読み方といえそうです。

四つ目は「賞の読み方」です。「芥川賞はこの作品が取るだろう」「この選者はこういう読み方をするだろう」といった読み方です。

作家を目指すみなさんにとって一番必要なのは「著者の読み方」です。自分にとって面白い、つまらないかではなく、その小説を書いた作家の立場になって読むのです。作者はなぜここでこの一行を書いたのか。なぜこういうタイトルにしたのか。書き出しをこのようにした意味はと、作家側に立ってじっくり想像してみる。すると作品の内側に入れて、作品と対話ができるようになります。読む側にばかり立っていると、作品はいつまでも他人事のままですし、小説を書く営みの真髄にも近づいていけません。

・小川洋子

小川洋子は、書くことについてこう言っています。私は決して創造や創作をしているわけではない。神様が贈ってくれる信号のようなものを発見して書いているのだ、と。

・夏目漱石『坊っちゃん』

夏目漱石の『坊っちゃん』にも同じテーマがあります。坊っちゃんにも「坊っちゃんは正しい」と言い続けた人物がいて、それゆえにあのストーリーがあるのです。

坊っちゃんは松山の中学に赴任した当初、赤シャツというやつはどうも気に入らないと思っていました。しかしその後、赤シャツから妙に親切にされるうち、赤シャツや野だいこにまるめこまれ、山嵐やうらなりとは背反する形になります。

赤シャツと野だいこ。彼らはある意味で「近代」であり「東京」です。人を組織化したり、利用したり、謀略を使ったりする。人間としては正しくないのですが、政治的、現実的には勝つ人たちです。

一方の山嵐とうらなりは、「江戸」であり、ある意味「会津」でもあります。そして彼らは、正しいのに負けてしまうのです。

坊っちゃんは、なぜ正しいほうが負けるのかと憤ります。坊っちゃんは「江戸」なのです。だから最後には、赤シャツ側に鉄槌を加えてやるという行動に出ます。小説というのは、やはり最終的には正しい人に勝ってはしいのです。

坊っちゃんのことを「正しい」と言い続けた人。それは、坊っちゃんに無条件の愛情を注ぎ続けた清（きよ）でした。清も、それこそ無力で名もなき老人です。

・村上春樹

村上春樹には、熱狂的なファンが多数いる一方、彼の作品はよくわからない、理解できないという人もいて、両極に分かれるようです。

しかし、村上春樹の小説は意外とわかりやすいのです。ただ、多層的に世界を書こうとしているために、いわゆるメタファーが多くなり、それが思わせぶりに見え、嫌いになる人もいます。

・書けば書くほど面白くなってくる

小説にも同じことがいえます。みんながみんな、プロの小説家になれるわけではありません。厳しい現実をいえば、プロの小説家になれる人はほんの一握りですし、まして小説だけで一生暮らしていける人など、かぞえるほどしかいません。

でも、小説を書きたい人の全員がプロになる必要もないのです。大事なことは、自分で手を動かし、心を自由に羽ばたかせて、小説を書いてみることにあります。すると書けば書くほど面白くなってきますし、読むときも、より深く小説を味わえるようになります。

それだけではありません。ものの見方、考え方に深みが出てきて、生きていること自体が楽しくなってくるのです。